



今、なぜ田中角栄なのか 作家 大下 英治様

卓話者紹介 田邊 恵三会員
1944年6月7日、広島県に生まれる。1968年3月、広島大学文学部仏文科卒業。1970年、『週刊文春』の記者となる。記者時代『小説電通』（徳間文庫）を発表し、作家としてデビュー。さらに月刊『文藝春秋』に発表した『三越の女帝・竹久みちの野望と金脈』が反響を呼び、岡田社長退陣のきっかけとなった。1983年、週刊文春を離れ、作家として政財官界から経済、芸能、犯罪まで幅広いジャンルで創作活動をつづけていらっしやいます。

リーマン・ショックをはじめ、日本に危機が訪れる度に、「もし角さんがいたら、どのような大胆な政策を打ち出すだろうか」という田中角栄待望論が強まっている。

今回、東日本大震災に続き、熊本大地震に見舞われ、いっそう田中角栄待望論が出てきた。

不思議なことに、「吉田茂が生きていたら」とか、「岸信介が生きていたら」との声は起こらない。吉田も、岸も、戦後総理大臣のうちではナンバー1か2かと評価は高い。むしろ、田中角栄より、総理としての評価は高い。にもかかわらず、危機に際しては、田中角栄待望論が出てくるのである。

なぜか。田中角栄なら、それまでの政策の延長線ではなく、大胆な政策を打ち出し、日本をガラリと変えてくれるのではないか。そう思わせるからである。

じつは、吉田も岸も、あるいは佐藤栄作も、池田勇人も、田中角栄のライバルで「角福戦争」を争った福田赳夫も、官僚出身の総理大臣である。

田中角栄が総理大臣になったとき、「今太閤」ともてはやされ、支持率が高かったのも、そのような期待があったからである。

そのシンボルとして、田中角栄は『日本列島改造論』と『日中国交回復』を打ち出した。

『日本列島改造論』には、この本でもふれるが、雪国新潟に閉じ込められて育った田中の夢があった。田中は、『日本列島改造論』の制作に関わった小長啓一総理秘書官に語った。

「高度成長時代は、東京へ、東京へ、という流れでやってきた。この流れを放任しておったら、日本はパンクしてしまう。その流れを一八〇度変えて、地方への流れにしなければならない。地方に二十五万人程度の中核都市をつくる。それこそが、日本の新しい生き残り戦略の最大ポイントだ。そのためには、地域にそれなりのインフラを整備しないといかん。新幹線鉄道網であり、交通道路網であり、航空路の整備に取り組む。東京に一極集中されれば、地方はどんどん過疎になる。過疎になれば、ますますインフラ整備ができない。日本は、いびつな不均衡発展になる。これは、もう大変なことになる。それを避けることを、いまから計画的にやっていかないと

けないんだ」

しかし、『日中国交回復』こそみごとに成し遂げたが、『日本列島改造論』は、さまざまな事情から、狙いどおりには運ばなかった。しかし、あの時代にはオイル・ショックもあったからで、その根本的考えはいまだに生きている。

それゆえにこそ、東日本大震災、熊本大地震を経て、田中角栄がいま生きていれば、『新日本列島改造論』をどう書くか、が話題になるのである。

田中は、日中国交回復をなしたが、現在、日本と中国の間は、経済交流こそ進められているが、政治となると、ギクシャクしつづけて、冷えている。

いま、田中角栄なら、中国とどう関係を深めていくだろうか。

また、内需に限界のある今、田中角栄なら、中国、インド、さらにアジアの国々を中心とした海外への進出をどのように展開していくのか。

田中は、エネルギー獲得にも熱をそそいだ。総理大臣時代に、第一次オイル・ショックに見舞われ、特にエネルギー獲得に必死となった。

田中は、日本のエネルギー問題を懸念し、日本のアラブ寄り外交を決めた。それを知ったアメリカのキッシンジャー国務長官は、田中に釘を刺した。「われわれは中東紛争の解決に全力を傾けている。中東和平は進んでいる。日本も政策変更などしないで、静観してほしい。これ以上、中東と仲良くすることはやめてくれ」

田中は問いかけた。

「今、日本は中東から八〇%以上、油を買っている。その油をアメリカが供給してくれるというのなら、おっしゃることに従ってもいいです」

「いや、それはできない」

それが、アメリカ側の答えだった。

田中とキッシンジャーの会談は物別れに終わった。

日本は、中東の政治に深く関わってはならず、イスラエルを直接支援したこともない。あくまで、中立の立場である。しかし、最大のイスラエル支援国家であるアメリカと強固な同盟関係にある日本は、イスラエル支援国家とみなされる可能性が高かった。

「湾岸産油国に、特使を出さなければいけない。日本は独自の外交方針をとるしかない」

これが、「アメリカの虎の尾」を踏んだことになり、ついにロッキード事件で逮捕されたとの説すらある。

田中は、原子力にも力を入れていた。それまで濃縮ウランをアメリカから買っていたのに、フランスからも買う挙に出たのである。

東日本大震災で福島第一原発の事故により、今後、原発をつづけるのか、脱原発に舵を切るのか、さまざまな意見が飛びかっている。

小泉純一郎元首相は、安倍晋三首相が進める原発に対して真正面から反対を打ち出し、その運動を細川護熙元首相と組み、エネルギーに進めている。

はたして、田中角栄なら、どのようなエネルギー政策を取るのか。

民主党政権時代、「政治主導」をうたい文句にし、ある意味宝といえる官僚を排除することに力を入れ、結局、使いこなせなかった。

あらためて、田中角栄の官僚にヤル気を起こさせ、官僚を使いこなした、本当の意味の「政治主導」が思い起こされる。

田中角栄は、各省庁の官僚の言うとおりに動く自民党の政治家が多い中、彼だけは、各省庁の制作に賛成することもあったが、反対するときには、はっきりと反対し、批判的であった。

「おれの考えは、おれの考えだ」

そのように、自分の考えをしっかりと持ったところは、他の政治家にはない個性であった。

閉会点鐘

小田 孝志会長

卓話予定

- 12月21日 「明治という奇跡」
元産経新聞論説委員 皿木 喜久様
- 12月28日 年末年始休会
- 1月 4日 年末年始休会
- 1月11日 新春落語 柳亭 楽輔様
- 1月18日 「酉年に見る今年の動静」 井上 象英様
- 1月25日 「演題未定」高橋 秀華様

創立/1993年10月13日(平成5年)
事務局/〒102-0073 東京都千代田区九段北1-2-2
グランドマンション九段906号
Tel: 03-3288-7300 Fax: 03-3288-7400
E-mail: ocha-rc@sirius.ocn.ne.jp
<http://tokyo-orc.jp/>

例会日 毎週水曜日 12:30～13:30
例会場 ホテルグランドパレス Tel: 03-3264-1111
会長 小田 孝志 幹事 奥山 聡
会報 八木 壮一(委員長) 松島 健(副委員長)
大原正道 佐々木啓策 山下秀一 山下憲男(委員)